

ポルトガル刺繍 毛糸で伝える刺繍文化

ポルトガル絨毯刺繍は7世紀にイスラム遊牧民により、イベリア半島に持ち込まれた絨毯製作に由来しています。古くから使われてきた「スラブ・ステッチ」のテクニックや、インド、日本、ヨーロッパとの交易で移入されたデザインなどが加わって、ポルトガルの伝統刺繍へと発展しました。

手芸としてのアライオロス（Arraiolos：リスボンの近くにある町の名）刺繍の特徴としては「毛糸の変形クロスステッチ」といえます。基本のステッチを繰り返し図案通りに埋めていき、粗目のジャバクロスに太い糸で刺しこむので、地厚な仕上がりになります。日本に最初にポルトガル刺繍を紹介した高橋紀世子先生は世界のステッチを組み合わせた糸のパッチワーク、残り毛糸を生かした作品づくりを手がけ、多くの生徒を育てられました。私もその一人で、最初の教室を読売カルチャースクールはじめ、東武カルチャースクール等の教室で多くの方々の指導にあたってきました。また、碑文谷サークル（目黒区）という同好会をつくり、日常の楽しみになるように、デザイン・手法を工夫し、特に毛糸の色合わせには力を注いできました。約20年を経過し、新しい生徒さんも増え、その内容も古典柄、現代柄、創作柄、モチーフと非常に幅広いものになりました。

2回目の椿寿荘の開催になりましたが、刺繍を通してポルトガルの雰囲気を楽しんで下さい。

2018年6月

高橋 泰子（日本手工芸協会 師範）